



# シリーズ 子どもたちの発達

## 子どもの遊びと発達

### 『声と言葉が伝える思い ～乳児のわらべうた遊び～』

最近になって、乳児保育の中で「わらべうた遊び」を保育材料として取り入れている園は徐々に多くなり、たくさんの本や CDなども売られるようになりました。しかし、「なぜ、わらべうたなのか？」という保育の意図や、子どもへの教育的意味を理解して(自覚して)実践している保育所(あるいは保育者)は、まだまだ少ないのかもしれない。というのは、わらべうたが号令の笛や合図のように歌われ、使われている光景に多くの保育現場で遭遇するからです。子どもの行為を、子ども自身の納得や意思で行えるような手助けよりも、「わらべうたにのせて」子どもの行動を誘導する。「お利口さん」？に遊べるようにわらべうたで方向付ける・・・。

まさに、保育材料・保育方法の切り取りという形で子どもにあてがっている、と言ってはいいすぎでしょうか？しかし、私には時々そんなふうに感じられて、わらべうたそのものの良さ、深さが生かされずに、子どもを「統制」する道具になってしまいかねないことに残念な気持ちを味わうことも多いのです。子どもを静かに座らせて、先生の話聞かせるために「手はおひざ！お口チャック！」という掛け声と同じように・・・。それでは、わらべうたは先生のものであり、子どものものにはなりにくいのではないのでしょうか？少なくとも、子どもが主体的に、自分から喜んで、という遊びや音楽として受け止めるのは難しいのではないかと思います。では、大人と子どもの双方にとって、わらべうた遊びはどんな意味をもたらすのでしょうか。

まず、最初にわらべうたの楽しさは、そのまま子どもの可愛さだと言えるでしょう。子どもが小さな赤ちゃんだったとき、赤ちゃんとのコミュニケーションの最初は大人が「泣き声」を聞き分け、受け止めることから始まります。産まれたその時から、子どもを一人の人間として尊重し、泣き声をとおして大人は子どもと向き合って話しをしていくのです。泣き声に、「お腹が空いたのかな？」「オムツがぬれちゃった？」「寂しくなっちゃいましたか？」「抱っこって言っているのかな？」と、話しかけながら、赤ちゃんの気持ちに答えているのです。また、小さな子どもが出し

た喃語に声を返したり、話しかけたりして会話をします。言葉が理解できなくても、こうして声や表情の動きを通して大人の感情を子どもは受け止め、自分も受け止められていると感じ、コミュニケーションは深まっていきます。

こうして、小さい赤ちゃんのときから話すことが基本であれば、子どもの中に自分から言葉と話したい気持ちも、他者の話を聞きたい気持ちも自然に育っていくでしょう。

### 言葉に旋律を持つわらべうた

乳児期のわらべうた遊びは、言葉や動作に音、リズムをのせた語感を楽しむことを子どもは喜び、大人との関わりに期待を高めます。それはちょうど、お祭りの“お囃子”のように行動と言葉がひとつの構成をもったものとして身体感覚全体を通して子どもの中に取り込まれていきます。例えば、歩き始めの子どもに♪あんよは上手、鬼さんこちら♪と囃し立てるように大人がかける言葉に勇気づけられて、子どもが1歩1歩、歩みはじめるように。

この言葉は、子どもの歩調のリズムに合わせられることで、その子が自分の力を存分に出し「上手に頑張って歩ける」ということとつながるので、その1歩1歩に合わせて唱えられることが意味を持っているのです。つまり、このお囃子のような唱えと、それをしてもらう子どもとの一体化が、より可愛らしい子どもの行為を生み出したり、大人が子どもの可愛らしさに気づいていくというコミュニケーションの機会と、身体感覚の共有から、子どもが言葉の意味を感じ、理解していくことへと広がっていくのです。こうして、母国語の語感が描き出すイメージにメロディがのせられ、心地よい響きになった旋律と言葉の構成から、子どもはまだ直接体験していないことや、少し難しい言葉の概念もその感覚の中に収めていっていると言えるでしょう。私たちがわらべうたを行うもう一つ大切な意味は、音楽的な感性を身近な人との楽しいコミュニケーションを通じて行うことで子どもにとっても柔軟に、無理なく養っていく可能性をもっているということです。特に、最近の子どもは機械音になれてしまっています。ともすれば、乳児期から人の声を聞くという経験よりも、テレビ、CDなどのデジタルな音の方がその子の経験として多いということもあるかもしれません。しかし、人間の身体は機械ではないのです。機械音ばかりの経験では子どもの身体の中に、その子なりのリズムが育ったり、人の声を聞いて自分の声を調節して話したり、歌ったり、高いとか低いとかの音別ができたりということも育ちにくいと言えるでしょう。

子どもにとって、音楽というのは楽器が弾けるとか譜面が読めるとかいうことではなくて、本来、人間が持っている要素を楽しむことにあるのだと思います。そのために、言葉、旋律、その

様々な構成要素である表現の基本的な部分を内面に育てていくことで、それが育った上に、いろいろな楽器が重なり、技術が重なっていくということがその人の「オリジナルな音楽的才能」を創造する上でも、単純に生活の中で音楽を楽しむ上でも大切なことだと思います。さらに、音楽は「大人からやらされる」ことではなくて、会話や遊びという中で、自然にその子に身についていくのが一番の喜びや楽しさを体感させていくのでしょう。テレビのうた、コマーシャルのうたも子どもたちは喜んでいたりします。そういう楽しみも現代ではあってもいいかもしれませんが、けれども、それはあくまでも「子どもが受身の状態」でしか行われていないということを私たち大人は知っておく必要があるでしょう。人間の根っこにある詩的、音楽的要素を育み、表現豊かな育ちを支える遊びの1つとして、わらべうたは乳児期からのすぐれた教育の素材だと私たちは考えています。そして、その素材を子どもそれぞれの個性や感性を通して、子どもと共に楽しみながら様々な形あるものに高めていくことで、思いがけない発見や、驚きと感動をもたらす芸術性へと子どもも、また大人自身をも育てていこうと思っています。

一人の人間の中に内包している豊かさを、わらべうた遊びを通して、子どもたちとたくさん味わっていきたいですね！

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage  
園長 日下部樹江

